



発行日 = 2005年2月25日 発行人 = 面出 薫 編集 = 田沼 彩子・中山 Rachel・上田 夏子
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼 彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : office@shomei-tanteidan.org http://www.shomei-tanteidan.org

照明探偵団通信

vol.21 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート

「自然光のつくるコントラスト」

～ Santorini・Athens, Greece ～

国内調査レポート

「照明探偵団 4 都調査」

～名古屋・大阪・札幌・福岡～

照明探偵団倶楽部活動 1

街歩き報告 (12/8 東京夜景ヘリコプター調査)

照明探偵団倶楽部活動 2

研究会サロン (12/15) 報告

照明探偵団倶楽部活動 3

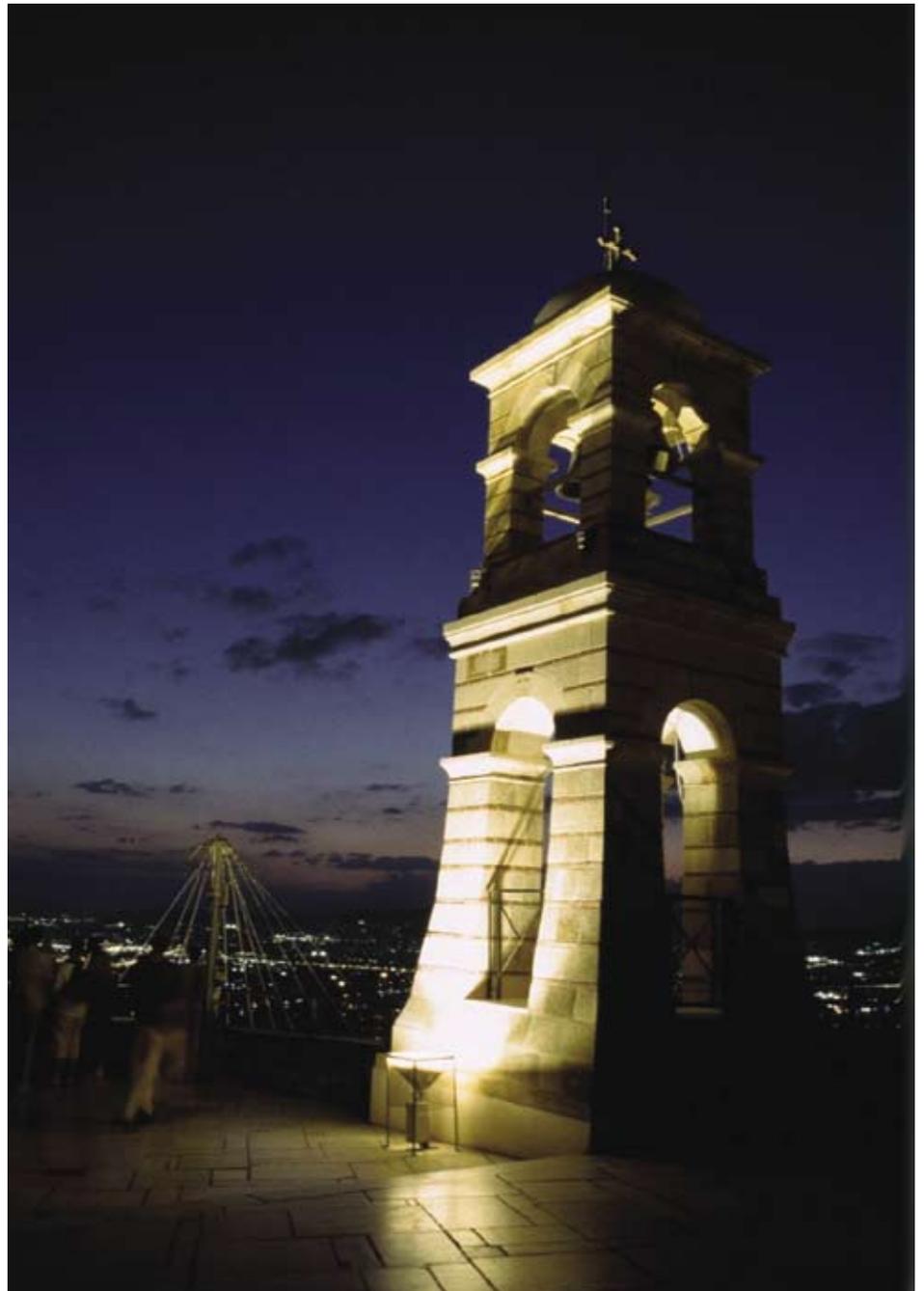
「TOKYO NIGHTSCAPE 2050」開催！

照明探偵団倶楽部活動 4

「100万人のキャンドルナイト@原宿キャット
ストリート」開催！

面出の探偵ノート

照明探偵団日記



アテネリカピトスの丘展望台

自然光のつくるコントラスト

Santorini・Athens, Greece

2004. 9. 4-10

窪田 麻里 + 田沼 彩子

■青と白の島、サントリーニ

ハンブルグでの Transnational Tanteidan

Forum の後、ずーっとヨーロッパを南下してオリンピックが終わったばかりのギリシャへ向かいました。東にはエーゲ海、西にはイオニア海という位置にあって、島の数なんと3300。その内のひとつ、エーゲ海に浮かぶ三日月形の島、サントリーニを訪れました。

「変化する自然光と断崖絶壁に建つ白亜の街並みを撮る」、というのが今回のミッション。どこまでも青い海と空、そしておもちゃのような白い街並みを写真で見たことはあったけれど、そのままの世界が眼前に広がると、自分がその場にいる実感なんて全然湧かないものです。

フィラはサントリーニの中心に位置するメインタウン。港から300mの崖を580段の階段か、ケーブルカー、またはロバのタクシーに乗って上がってくると、小さなホテル、レストラン、ショップなどが段々畑状に並んでひしめき合うこの町に到着します。夜になると観光客相手の宝石店の周囲だけが異様な明るさを保ち続けるものの、狭い裏通りは深い闇に包まれていました。

フィラからバスで30分ほど北へ走ると島の先端部に位置する小さな街、イアへ到着します。フィラよりもさらにこぢんまりとしたこの町は、ホテルよりも別荘のような住宅が多い。屋間は白を背景に強い太陽がつくるコントラスト、そして時間とともに変化し続ける空、海の何種類ものブルーが重なる風景が、夕暮れ時からは“世界一美しい”と言われるサンセットが毎日繰り返し返されます。建物が断崖にそそり立つように西



イアの街に点在するギリシャ正教の教会

側に向けて建てられているので、夕日に映える町並みも同時に臨むことができます。

イアの町にはポール灯や街路灯は見当たらず、フィラ以上に公共とプライベートの境がよくわからない。海辺という環境のためか、どこに付いている器具も水中照明のような頑丈にプロテクトされたものが一般的でした。唯一の公共照明とも言えるフットライトが10mピッチぐらいで付いてはいますが、夜になっても全てが点灯する訳ではありません。

白の背景がベースにある、と言うのがサントリーニの照明環境を語る上で何よりのポイント。

この背景を借りて刻々と移り行く自然光の繊細な変化が浮き彫りにされてきます。ただ夕暮れから夜にかけての一番いい時間帯に見えてくる景色としての人工照明にはもう少し工夫があってもいいのでは・・・。教会などのシンボリックな建物も大型投光器の白い光で大雑把に照らされているだけだったり、壁面が照らされること無くただ闇に埋没してしまっていたり。屋間の繊細な自然光のバリエーションを目にしてしまった後には、夜は残念ながら物足りない印象が否めませんでした。



リカピトスの丘より見るアテネの街並み



宝飾店は昼も夜も真っ白な光を放っている



あかりが灯り始めたイアの夕暮れ

照明探偵団が世界中どこへでも調査へ行く・・・とは言ってもまさかエーゲ海まで行くとは思いませんでした。見渡す限り青と白の景色が広がるサントリーニ島、そしてオリンピック後の興奮さめやらぬアテネへ。日常の風景の中に遺跡が点在するような街に新しい照明はどう取り込まれているのでしょうか？

■オリンピック後のアテネ

サントリーニを後にして、向かったのはギリシャの首都・アテネ。サントリーニの澄んだ空気に比べると、さすがにアテネは都会。埃っぽく霞んだような印象。しかし、オリンピックに向けて急ピッチで進められてきた関連施設の建設や交通網の整備が一段落していて、とくに国会議事堂付近やオリンピック施設、その他主要な観光施設周辺は整然としていました。国会議事堂前のシンタグマ広場は以前に訪れた時はできるだけ通りたく無いような鬱蒼とした雰囲気だったのですが、違う場所にきたかと錯覚するほど。真っ白でまぶしい照明が夜間にも広場を支配しています。ただ、一番明るいところで300ルクスも出ているものの、広場に続く階段は真っ暗闇。明暗のコントラストが大きく、輝くまぶしい太陽のような光は昼間と重なってくる風景。ヨーロッパのあたたかく、しっとりとした夜の景色を想像していたので、白くてまぶしい光はちょっとした衝撃でした。

■街中が遺跡博物館

アテネを訪れた観光客が必ず訪れる場所、とも言えるのがアクロポリスにそびえ立つパルテノン神殿。昼間は青空のもと、ドリア色の巨大な石柱に囲まれた勇姿を臨むことができます。ギリシャの強い太陽に照らされ、長い年月を経て風化はしているものの、その下に立つとその一瞬、自分が歴史を共有できるような感じがします。

アクロポリスの丘のすぐ下は“プラカ地区”。19世紀頃の古い町並みそのまま保存されて

いる地区で、狭い道が入り組み、瓦のような古い屋根が所狭しと並んでいる様子がする下に見えている。

ふと足下を見てもものすごい数の投光器がこちらに向けられている！夜には小高い丘に立つこのパルテノン神殿を下方から無数の照明探偵団でアップライトしていました。夜にアクロポリスの丘の向かいにあるフィロパポスの丘へ登り、この様子を見ることに。時間になって一斉に照明器具が点灯されると、暗闇の中にオレンジ色に染まったパルテノン神殿が、昼間とはまた違った姿を現しました。照明手法が良いと

か悪いとか、それ以前に見る者を黙らせるほど迫力ある建物が闇に浮かび上がる様子は、何ともドラマチックなものでした。

地下鉄駅構内で驚いたのが、地下鉄を建設中に出土した遺跡がそのままの場所に展示されていること。街中どこを掘っても遺跡が出てきてしまう、という話を聞いて、常に歴史と隣り合わせて生活している人達の暮らしを実感しました。

(田沼 彩子)



強い太陽に照らされるパルテノン神殿



明暗のコントラストが大きいシンタグマ広場



地下鉄駅構内に出土した遺跡がそのまま展示されている



プラカ地区からパルテノン神殿を望む

照明探偵団 4 都調査

照明探偵団がこれまで長い年月をかけて行ってきた世界各国の調査記録の数々。そのストックはどこにも負けないと自負できるものです。が、一番近い日本の街はどうなっているのだろう？またすぐ行けるから・・・と最近はややおざなりになっていましたが、日々進化し続ける日本の各都市にも見るべきもの、調査すべきものはあふれているはず。

と言うことで、今回は名古屋、大阪、札幌、福岡の四都市をまとめて一挙調査してみました。

「都市照明調査・名古屋」

2004. 8. 31 - 9.1

岡本 賢

今や日本を代表する都市となった名古屋。そのイメージはといえば「味噌カツ、味噌煮込みうどん、ひつまぶし、てんむす……。」なぜか食べ物ばかり思い浮かんでくるのは私だけでしょうか？今回は都市照明調査と題して、夜の名古屋を散策してみました。

■久屋大通り

第二次世界大戦により名古屋の町は大半が焼き尽くされました。戦後の復興計画の中で災害を防止すると同時に、避難所としての活用を目的とした2本のクロスした100メートル道路が計画されました。そのうちの一本が久屋大通りです。道路を挟んで真中にはいくつかのブロックに分かれた公園があり、その長さは約2キロ程で南北に広がっています。まずは屋間に公園内の調査を開始。セントラルパーク・リバーパーク・エンゼルパーク・ロサンゼルス広場など個性的なネーミングの公園が印象的です。全体的に3～4m程度のポール灯で構成されて光源はナトリウムランプ8割、水銀灯2割といったところでしょうか。ランプ自体が直接見えるものが多いのが気になるところです。特徴的なものとして挙げられるのは公園内には様々なオブジェの為の照明です。ポール灯にスポットライトなどのオプションが取り付けられるようになっており、必要に応じてオブジェなどの明るさを確保しています。

夜の公園内はやはり演色性の悪いナトリウムランプのオレンジ色で支配されています。屋間はあまり気になりませんがほとんどポール灯の照度に頼った照明計画でフットライトやボラード、インジケーションなどアクセントとなる照

明がないことに気が付きます。公園内は背の高い樹木がたくさんあるので、夜はポール灯のあかりはあってもどこか薄暗い感じがして昼間の気持ち良い空間はどこへやら……。ちょっと勿体無い気がします。しかし残念なことばかりではありません。この久屋大通りの夜景のすばらしい所は公園のどこにいても見えるテレビ塔を背景にした景色ではないかと思えます。ライトアップされた噴水越しに見るテレビ塔、セントラルブリッジ越しにみるテレビ塔、セントラルパークから見るテレビ塔、オアシス21から見るテレビ塔どれも絵葉書のようなカットばかりです。

■大津通り

久屋大通りを一本隔てたところに大津通りという通りがあるのですが、日本ではあまり見かけない面白い照明手法がとられています。両脇の歩道に設置しているポール灯にオプションで投光器を取り付け建物のファサードを照らすという試みです。一見どこにでもありそうですが、日本では様々な問題から実現することが少ない手法です。建物ファサードがライトアップされると鉛直面の明るさが確保されて実照度以上に明るさを感じます。日本でもこのような照明計画が増えると夜の町の景色も少し様変わりするかもしれませんね。

■高所撮影

名古屋を代表する夜景撮影のポイントとしてJRタワーとテレビ塔が上げられると思います。都市照明調査というからにはこのポイントをはずす事はできません。名古屋駅周辺の夜景はナトリウムランプの割合が多く、メインの通りに

政令指定都市の中では大阪に次ぐ人口を持ち、今最も勢いのある街「名古屋」を都市照明に着目して調査しました。名古屋のシンボルであるテレビ塔を中心に南北に広がる久屋大通りや、名物の地下街等を歩き回り個性ある光に出会いました。

光が集中し光の密度が段々減っていくといったイメージです。屋内の高所で夜景を撮影する際に最も気をつけなければならないのがガラスへの映り込みです。室内の壁面等が照明で照らされているとガラスに映り込んで夜景がうまく撮影できません。JRタワー・テレビ塔ともにガラスに映り込みが生じるコンディションだったので、やむなく黒い布をかぶり光が入らないようにガラスにできる限り密着し30分程撮影をしていました。短いブルーモーメントの時間帯を逃すまいと必死に撮影していたので周りの事はほとんど目に入っていませんでしたが、周りの人からはきつと怪しい人に見えたに違いありません。皆さんも室内での高所撮影の際は是非お試しください。

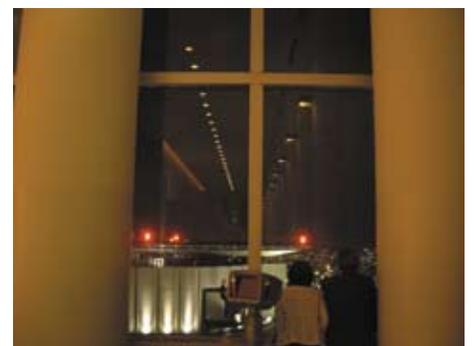
(岡本 賢)



テレビ塔から久屋大通りを見る



噴水からTV塔を望む



展望台の映り込み



TV塔からオアシスを観る

「都市照明調査・大阪」

2004. 11. 10 - 11

平岩 洋介

御堂筋は大阪の中心部を約4kmに渡り南北に貫くメインストリートであり、広幅員街路とイチヨウ並木がその特徴といえます。南方には心齋橋や道頓堀など全国的にも有名な繁華街が位置し、老若男女を問わず多くの人で一年中賑わいを見せています。一方、御堂筋中心付近から北方にかけてはオフィスビルが整然とほぼ同じ壁面線上に並んでいます。中之島付近は市役所や図書館といった公共施設が建ち並ぶエリアです。御堂筋の夜景を北方から眺めると、交通量の多い一方通行路のため自動車のテールランプが作る真っ赤な光の川がとても印象的です。ライトアップなど光で演出された建物はほとんど見られず、遠方に見える通天閣のネオンだけが大阪らしさを主張していました。

視点を下げると夜景を形作る光の要素が見えてきます。御堂筋の視環境の主演は豊かなイチヨウ並木です。4列の並木のうち中央車線に面した2列は白色の光でライトアップされ、ドライバーにとって心地よい光環境を提供しています。一方、歩道は全般的に暗く、閉塞的な印象を受けます。昼間は緑が青空に美しく映えるイチヨウの葉ですが、夜には間近に迫り視線を遮る黒い壁に変わります。イチヨウは人の手が届くほど下方から葉を茂らせるため、歩道照明から路面への光を遮っている箇所が多くみられました。歩道面での照度は10ルクス程度です。これはJISで定められた歩行者道路の照明基準内ではあるものの、大都市・大阪のメインストリートとしては低照度であるといえます。ただし、これは今回の調査を行った時期に限ったこ

とで、御堂筋が四季によってその姿を変えるイチヨウの並木道であることを考えると、光環境も一変すると思われます。新緑にも道行く人の服装にも色彩を与えない演色性が悪いナトリウムランプですが、秋に黄葉する葉との相性は抜群に良いでしょう。落葉し視線が抜ける冬には路面に達する光もずいぶん多いはず。四季を通した調査が必要かもしれません。

高所、地上に続き地下に目を向けると、御堂筋の地下では面白い光が見られました。地下鉄御堂筋線の各駅ホームには数十本の蛍光灯によるシャンデリアが並んでいます。意図された(?) やや下向きに付けられた蛍光灯が、全国的にも珍しい地下鉄ホームのヴォールト(アーチ型)天井にそって綺麗に光をまわしていました。御堂筋線で南に向かうと昔ながらの景色を残した通天閣のある新世界エリアに出ます。ネオンで縁取られた通天閣の展望台からは都心の現代的な光まで見渡せ、眼下の景色と対照的に映ります。大阪では都心部の再開発が現在進行中です。都市機能の中核を目指す中之島西部や西日本最後の一等地といわれる大阪駅北地区では今後景観が一変することでしょう。そのころ再び探偵団がお邪魔します。
(平岩 洋介)

暖冬でも盛り上がりを見せ始めたクリスマス商戦の中、関西随一の都市大阪を訪ねました。水都としての水辺の灯り、大阪らしい商いの光など数あるテーマの中で、今回は日本有数の大通りである御堂筋の照明事情を中心に調査をしてきました。



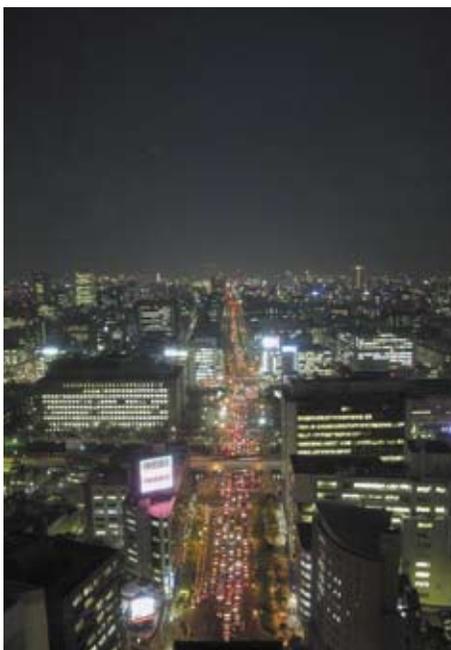
ファサードへの視線を遮る木の壁



生茂る葉に埋もれた歩道照明



地下鉄駅の蛍光灯シャンデリア



御堂筋夜景



再開発が進む中之島西部地区

「都市照明調査・札幌」

2004.12.8-9

奥中 顕子

札幌の冬のイベントといえば雪まつりを思い浮かべる人がほとんどだと思うが、11月下旬からホワイトイルミネーションが開催されているをご存知だろうか。会場となる駅前通りと大通公園が37万個のイルミネーションに彩られるこのイベントは、昭和56年に始まり今年で24年目を迎える。そのホワイトイルミネーションを見ようと、12月初めの雪の舞う札幌を訪ねた。

調査を開始した昼間は写真を撮るのもままならないほどの雪に見舞われたが、イルミネーションが点灯される4時には少し青空を見せ始めた。都心に比べるとずいぶん早い時間に点灯されると思うであろうが、3時をすぎれば陽が陰りはじめ5時には真っ暗になってしまう冬の札幌では、この時間がいいようだ。

初めに訪ねた駅前通りでは、通りの中央分離帯の並木に小丸電球がぶら下がるように取り付けられている。樹木の場合、枝にそって取り付けられるイルミネーションが多い中、このようなぶら下がるデザインは個性的である。樹木から連なり落ちる光の粒が風にふかれて一斉に揺れるのがかわいらしい。歩道にはナトリウムランプを用いた乳白グローブのポール灯が立ち、そのオレンジ色の光とイルミネーションとが相まって、通り全体が温かみのある光にまつまれている。しかし、少し残念なことは、歩道から道路中央のイルミネーションを見ると、道路の反対側に立つビルのサインが背景になってしまうことだ。せっかくのイルミネーションが赤や緑や白の雑然とした看板にかすんで



イルミネーションが灯る駅前通り

まっていた。

大通公園では、テレビ塔のある西1丁目から西8丁目までの約1kmの間で、さまざまな光のオブジェ達が出迎えてくれる。色とりどりの光を見にやってきた人たちが、ゆっくりと眺めたり写真を撮ったりと、思い思いに楽しんでいる。三脚をかかえて本格的に撮影している人も多い。かく言う私もそのうちの一人ではあるが、西1～4丁目までの宇宙やクリスマスを表現したオブジェでは、主に小丸電球が用いられており、白熱色を中心に赤、青、緑が用いられて

雪が舞い降り始める12月の札幌。大通公園は、ホワイトイルミネーションの輝きとライトアップされたテレビ塔がつくりだす華やかな情景を楽しむ人々で溢れていました。



西2丁目からテレビ塔を眺める

いる。ところどころに取り付けられたフラッシュライトがランダムな強い光を放ち、動きのあるシーンをつくっている。

西5～8丁目までは、カラーHIDのブルーとグリーンで樹木がライトアップされている。地面に降り積もった雪と一緒に照らされているところもあり、冬の澄んだ空気を一層引き立たせるような色がなんとも幻想的な雰囲気をつくりだしている。ただ、こちらのほうは、1～4丁目に比べて人がほとんど歩いていない。やはり、オブジェのようなにぎやかさがなく人気がないのだろうか。

すっかり夜も更け、22時になったところでテレビ塔や時計台のライトアップとともに、イルミネーションも一斉に消灯され、静かな札幌の表情に戻る。ここまで歩いて来てさすがに身体も冷え切ったところで、食事をとることにした。さっぽろラーメンで身体を温めながら、寒い中にもかかわらずイルミネーションを楽しむ人たちの表情を思い返し、光の持つ可能性をあらためて感じたのであった。

(奥中 顕子)



JRタワーから見た札幌市街



西5丁目「光の森」